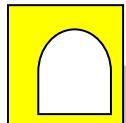


日吉台地下壕保存の会会報



第151号
日吉台地下壕保存の会

第25回戦争遺跡保存全国シンポジウム広島大会に参加して

副会長 亀岡 敏子

2022年8月20日から22日まで、第25回戦争遺跡保存全国シンポジウム広島大会が、広島市青少年センターを会場に3年ぶりに対面で開催されました。ちょうど新型コロナ感染者数が多くなり、不安もありましたが、現地実行委員会と全国ネット運営委員会は、開催に踏み切りました。テーマは「旧軍都・被爆都市を経て、戦争遺跡保存の原点となった広島から、戦争も核兵器も許さない世界の創造に向けた取り組みを深めよう」、という当大会の内容と願いを言い尽くしたものになりました。会場は太田川と中島にかかり、原爆投下の目標となったと言われる、T字型の相生橋から上流に数分歩いた、まさに当時の爆心地にあります。

戦跡保存活動の原点である広島でのシンポジウム開催は、1995年に戦争遺跡保存全国ネットワーク結成以来の願いでした。広島の戦争遺跡がどのような性格を持っているかは、今大会の資料を入れたA4大の封筒に印刷された2枚の写真が象徴しています。原爆ドームと、旧陸軍被服支廠倉庫が並んでいるのです。被害の象徴のドームに比べ、陸軍将兵の軍服を作り続けた、4棟の巨大な赤煉瓦倉庫は、加害の軍事施設です。しかし、これらの倉庫群は、同時に多くの被爆者が収容され、おそらくは多くの命が失われた、被害の建物でもあります。長崎においても同じことが言えるでしょうが、それらは被害と加害の二面の歴史と、さらに複雑な現実を持っているのだということが、次第に分かってきました。

(1) 講演会・会員総会(8月20日)

薄曇りで暑さが少し和らいだこの日、午後になると、受付を済ませた参加者がホールに集まり始めました。心のこもった開会挨拶に続いて、記念講演、基調報告、地域報告が、以下のように行われました。



広島原爆ドームは会場のすぐそば

【目次】

<u>巻頭言【1-3p】</u>	「第25回戦争遺跡保存全国シンポジウム広島大会に参加して	副会長 亀岡敏子
<u>分科会報告【3-6p】</u>	戦争遺跡の教育的活用の取組み	運営委員 田中剛
<u>現地見学会報告【6-9p】</u>	「呉の軍都遺跡、地下壕巡り」に参加	運営委員 岡本雅之
<u>戦争遺跡見学【9-11p】</u>	毒ガス兵器とウサギの大久野島を訪ねて	運営委員 山田譲
<u>報告【12-14p】</u>	第34回日吉台地下壕保存の会、定期総会	
<u>お知らせ【14-15p】</u>	第27回平和のための戦争展 in よこはま	
	事務局・本会会員 吉沢てい子	
<u>選択旅行【15-17p】</u>	「日吉台地下壕フィールドワーク」報告	会長 阿久沢武史
<u>連載【17-18p】</u>	海外戦跡巡り(21) ホテル便り(中)	
	ホテル・マジャパヒト インドネシア	運営委員 佐藤宗達
<u>報告【18p】</u>	地下壕展示会と講演会	運営委員 小山信雄
<u>原稿募集【18p】</u>	150号達成記念原稿を募集します!!	
<u>慶應義塾大学出身の元学徒兵 岩井忠正さんを悼む【18p】</u>		運営委員 遠藤美幸
<u>お知らせ【19p】</u>	福澤諭吉記念 慶應義塾史展示館 展示のお知らせ	
<u>活動の記録【20p】</u>	2022.6月~9月	

☆記念講演「ヒロシマの願いを世界へ -平和行政の歩み-」

原田 浩氏 元広島市国際平和担当理事 元広島市平和記念資料館館長

原田氏は、6歳の年に、両親と疎開のために汽車を待っていた広島駅で被爆したそうです。死者の身体を踏んで逃げたこと、その時の両足の感覚は今も忘れられない、という壮絶な被爆体験に立脚した講演は、胸に迫るものがありました。当時の広島市の人口は35万人いたのが、原爆後には14万人に激減したとのことです。

☆基調報告「戦争遺跡保存の現状と課題 2022」

菊池 実氏 戦跡保存全国ネットワーク運営委員

菊池氏は、当ネットワークの立ち上げから、その中にいる考古学者で、十菱駿武氏（当ネットワークの前共同代表）と共に、戦跡考古学のさきがけです。多くの資料を駆使して、戦争遺跡をめぐる状況、国内外のシンポジウムで戦争遺跡がどのように捉えられているか、自治体別の戦争遺跡への対応はどうなっているのかなど、貴重な報告がなされました。

☆現地報告1 「第二次大戦時の広島市における軍事施設について

-旧陸軍中国軍管区輪重兵補充隊跡、旧広島陸軍兵器補給廠（支廠）跡の遺構を中心に-

藤野次史氏 広島大学名誉教授

原爆被害のインパクトがあまりに強すぎて、広島が明治時代から的一大軍都であり、加害の側面も合わせ持つことを、私は最近まで知らなかった。藤野氏は、中国・四国地方の中心である広島の歴史から説き起こし、明治時代には6鎮台のひとつが置かれ、その後対外防衛のための施設が拡充し、第5師団となった経緯を話されました。そして今、広島市民は、加害の遺構を調査研究し、保存のための活動をしています。

☆現地報告2 「旧陸軍被服支廠倉庫保存問題の現在及び被爆遺構展示館の意義と課題」

多賀俊介氏 廣島・ヒロシマ・広島を歩いて考える会

多賀氏は広島大会の現地実行委員長を務めていますが、専門の学者でもなく、専門職の行政の職員でもない、普通の市民です。そんな普通の市民や若者グループが、1913年に鉄筋コンクリートと煉瓦を組み合わせて建てられた、巨大な4棟の被服支廠倉庫群を、解体から保全へと県の方針を変更させました。更に、県として重要文化財登録を目指そうと宣言するところまで持ってきました。2019年に起こった解体の動きへの素早い反応が功を奏したのでしょう。

被爆遺構展示館は、平和祈念資料館本館の免振工事が始まり、この地が生活の場であったことを示す遺品や遺構が発掘されたことに始まります。市民の2015年からの声により、「被爆遺構展示館」が完成した。広島の戦争遺跡保存と活用は、専門家、行政、市民の議論から形成されてきたのだ、という事実に対して、圧倒されました。

☆会員総会

コロナ禍の2年8カ月は、戦跡保存全国ネットワークにも、それぞれの団体にも個人にも、さまざまな影響がありました。顔を見合わせての会合は、それを乗り越える力が湧いて来るようと思えました。最後に2日目の分科会の打ち合わせをして、カキフライ定食の夕食を食べ、19日の実行委員会の会議疲れと、久しぶりの旅行疲れで、直ぐに休みました。

(2) 分科会と閉会集会(8月21日)

戦跡保存全国シンポジウムも、同じ形態で四半世紀も続いていると、分科会に関して、運営委員の中からも様々な意見がありました。また報告者の中にも、報告内容と時間も守られないし、分科会レポートA4、2ページ分を何枚もはみ出して、載せたもの勝ち、言ったもの勝ちのような時期もありました。

今年の分科会に関しては、当会からの報告者である田中剛氏報告に分科会レポート一覧が載っていますが、内容は多岐にわたります。私は全国ネット運営委員の役割として第3分科会を担当し、最後の全体会で内容報告をしました。今回は自由討議の時間がとれ、活発な発言がなされました。中でも、広島市の被爆体験継承プログラムに関しては、短時間ではなく、その経緯や研修内容など、情緒的にではなく事実として報告してもらい、「体験を継承する」とはどんなことか、知りたいと思います。

最後の閉会集会で、発足時からの共同代表である十菱駿武氏にかわり、菊池実氏を新しい共同代表に選びました。続いて広島市宛の「広島城周辺の地下被爆遺構の調査と保存を求める大会決議」を採択し、次に「旧軍都・被爆都市を経て、戦争遺跡保存の原点となった広島から 戦争も核兵器も許さない世界の創造に向けた取り組みを深めよう」という長いタイトルのアピールも採択されました。コロナ禍の中の困難な状況で、成功裡に終わった広島大会の実行委員に感謝の拍手と、再来年の大会開催に名乗りを上げた北九州の実行委員への期待の拍手で大会は締めくくられました。対面の良さを、十分に納得した大会でした。

(3) 現地見学会(8月22日)オプション

- A 広島市内・被爆遺跡巡りコース
- B 呉の軍都遺跡、地下壕巡りコース
- C 太田川上流の朝鮮人労働、強制連行中国人労働によるダム建設と補償・和解の取り組みを学ぶコース
- D 平和記念公園と周辺の被爆遺跡・碑をめぐるコース

分科会報告

戦争遺跡の教育的活用の取り組み

～日吉台地下壕見学会の例から～

運営委員 田中 剛

大会2日目の21日(日)は、9時から15時まで同センターにて「分科会」が開催され、全国からの様々な取組み事例の報告と、熱く活発な意見・情報交換が繰り広げられました。

第1分科会は「保存運動の現状と課題」、第2分科会は「調査の方法と整備技術」、そして第3分科会は「平和博物館と次世代への継承」をテーマとして、以下に示した「分科会レポート一覧」のメニューに沿って、それぞれのレポート報告が行われました。

私が参加したのは第3分科会ですが、ほかに当会メンバーである山田譲さんと中田均さんが、それぞれ第1・第2分科会でレポート報告されたことを申し添えておきます。

各レポート報告の詳細については、主催する「戦争遺跡保存全国ネットワーク」のホームページ上に後日掲載される大会報告集にゆだねることとして、ここでは私がレポート報告した内容について、以下のとおり大会レジュメから転載して、ご報告させていただきたいと思います。結果として、当会発足時から脈々と行われてきた見学会の変遷・経過と、慶應義塾ほか学校における教育的活用の広がりを、コンパクトにまとめた形となりました。

1. はじめに

日吉台地下壕とは、横浜市港北区の日吉駅周辺に存在する、旧帝国海軍が建設した地下壕群の総称です。そのほとんどが駅東側に広がる慶應義塾大学日吉キャンパス内に位置することから、開発などの破壊を免れ、観光資源とする環境に無く、これまで見学会の開催や学術調査の実施など、海軍が使用した地上施設とともに、歴史・平和学習のための教育資源として役割を果たしてきました。その中で、当会が見学会を開催している連合艦隊司令部壕は、1944年9月に同キャンパス内の寄宿舎に移転してきた司令部が使用するために、長官室や作戦室、電信・暗号室などが設えられた、実際に戦争指導・遂行のために

終戦まで機能していた地下壕です。ここでは、当会がガイドする見学会から、教育的活用の実例とその広がりを紹介します。

2. 定例見学会

1989年の当会発足当初から、一般の方々や各種団体を対象に隨時で開催してきました。2001年4月に慶應義塾による壕内整備工事が完了し、堆積土砂の除去搬出によりキャンパス内からの出入口を確保、排水栓のふた設置などで安全性が向上し、広く児童・生徒や一般の見学者を迎えることが可能となりました。同年11月から毎月1回、2016年1月からは毎月2回に増やし、そのほか2009年からは夏休み期間中に子ども向け見学会を複数回追加開催しており、隨時開催も合わせると、最大では年間約2700名の見学者を案内した年度もありました。

参加者の中で目立つのは大小様々な生涯学習グループの方々、慶應義塾のOBや学生仲間などで、やはり夏休み期間は子ども連れのご家族が多く参加しています。コロナ禍により一時活動休止となりましたが、2022年3月から待望の一般向け見学会を再開し、検温・消毒など感染対策にも配慮しながら、毎月1回、参加者を30名に半減縮小して開催しています。

3. 地元小・中学校の見学会

日吉地区とその周辺地域の小・中学校は、コロナ禍以前は毎年恒例で見学を行っていました。概ね小学校では6年生、中学校では2年生での見学が多く、学年単位での受入れとなるため、ガイドの人員確保や入れ違いでのコース設定など工夫が必要になります。何よりも「空襲、特攻、零戦」など戦時中の用語を知らない子も多いため、言葉を置換えたり噛碎したりとガイドの技量が試される見学会です。併せて「昭和」の時代感覚がほとんど無い世代のため、年代を伝える際には西暦を使うように心掛けています。

コロナ禍によって見学が休止される中、当会では積極的に学校へ出向こうという趣旨から、2021年3月にパワーポイントを使用した出張授業用スライドを作製しました。

時代背景や壕内の様子、地元の空襲被害などで構成し、見学会に参加しているのと、ほぼ同様の内容が盛り込まれています。すでに地元小学校からの要請で2度実演を行いました。

4. 慶應義塾内の取り組み

(1) 学内での調査研究

主な事例では、2008年にキャンパス内の新体育館建設現場で、航空本部や東京通信隊などが使っていた地下壕出入口を当会が偶然発見し、それを契機に慶應義塾は諮問委員会を設置して、その答申に基づいて遺構の保護と体育館の建設場所の移動を決定しました。その際、2009～2010年にかけて慶應大の民族学考古学研究室が発掘調査を実施しました。

(2) 慶應義塾高校等の見学会

キャンパス内の第一校舎は、1944年3月に最初に軍令部第3部が移転してきた地上の戦争遺跡ですが、現在は慶應義塾高校の校舎として使用されており、そこで国語の教壇に立つのが当会の会長でもある阿久澤教諭です。会長就任時の2015年以降は、同校の生徒たちを対象に参加希望を募って、課外授業としての見学会を隨時開催し、特攻に散った戦没慶應大生・上原良司の手記を引用しながら、キャンパスの歴史を積極的に発信しています。併せて、慶應大系列高校の生徒の見学会も行っています。参加生徒の感想文には、思わず気付かされる新鮮な記載も見受けられ、毎回楽しみです。

(3) 「日吉学」の授業

慶應大教養研究センターの設置科目で、文系理系を問わず、系列の中学生から大学院生までを対象とし、日吉キャンパスを舞台に調査観察・問題発見・課題解決に取組む授業です。実地の授業メニューとして地下壕見学を取り入れ、2021年4月に見学会を行いました。

(4) 「近代日本と慶應義塾」の講座

慶應大福澤研究センターの設置講座で、都倉准教授が主催する福澤諭吉や慶應義塾を視野に日本の近代化を考える講座です。2022年5月の2回の授業枠に、それぞれ当会の阿久澤会長と亀岡副会長が登壇し、「キャンパスの戦争遺跡」「戦没塾生上原良司」について講演を行いました。7月には実地の授業メニューとして、2日間に分けて地下壕見学を行いました。

(5) 社会学専攻 工藤ゼミ生の見学

2021年9月に、当会のガイド活動をテーマとする卒論執筆にのぞむ4年生1名に対応し、地下壕見学とともにガイド活動に関するインタビュー取材に応じました。また、2022年度のゼミ共同研究のテーマとして「戦争」を取り上げ、7月に地下壕見学を行いました。

(6) 日吉キャンパス事務センターの研修等

2022年5月に、地下壕保存管理担当部署の新人職員研修のため見学会を行い、さらに6月には、慶應大民族学考古学研究室の安藤教授と施設環境担当の職員2名、当会から阿久澤会長以下2名により壕内外の点検と状況確認を行い、情報共有の機会を設けました。これをきっかけに、環境整備と予算化に向けた検討がようやく始まったところです。

5. その他 学校関連の見学会

日吉周辺の小・中学校や慶應義塾関連以外にも、歴史・平和学習の教育資源として位置づけて、毎年定例的に見学に訪れる熱心な学校があり、見学の早期再開と定着化が望まれます。

6. 将来に向けて

ガイドを担う私たちは、見学会参加者の様々な反応を受け止めて学び、より熟達した案内を目指すことはもとより、幅広い年齢層の方々に地下壕の存在と戦争の実相を伝えることで、参加者それが戦争回避への正しい思考と自己判断ができるようになることを望んでいます。

まずは、コロナ禍以前の見学会規模に復旧させること、そして現在見学が許可されていない、慶應義塾関連以外の小・中学校等の学校見学の受入れを再開することが切に望れます。

併せて、地下壕の管理主体である慶應義塾との一層良好な関係を構築し、歴史・平和学習の資源としての価値向上と維持、適正保存の流れにつながっていくことを願ってやみません。

以上が、大会レジュメに掲載した報告内容です。

これまでの見学会は、一般の方々をはじめ近隣の小・中学校生を中心でしたが、ここ数年は慶應義塾内でも徐々に教育資源と



第3分科会で発表する田中運営委員と質疑応答風景

して活用する機会が増えて、新たに授業の一環として地下壕見学を組み込むなど、学内での取り組みに広がりが見られることは歓迎すべきことだと思います。

さて報告に続いては、項目3で紹介した「出張授業用スライド」を投影し、参加者に披露しながら日吉台地下壕の概要説明を行い、私のレポート報告を終えました。報告内容についてアドバイスをいただきました皆さんには、あらためて感謝申し上げます。

さらに分科会終了後の閉会集会では、大会の振り返り総括が行われた後に、アピール「旧軍都・被爆都市を経て、戦争遺跡保存の原点となった広島から戦争も核兵器も許さない世界の創造に向けた取り組みを深めよう」と「広島城周辺の地下被爆遺構の調査と保存を求める大会決議」を採択し、来年度の再会を期して盛会のうちに広島大会は終了しました。

第25回広島大会分科会レポート一覧

【第1分科会（保存運動の現状と課題）】

No.	氏名	所属団体	レポート題名
1	金澤 大介	筑波海軍航空隊記念館	茨城県最大の戦争史跡「鹿島海軍航空隊跡地」の未来について
2	楠本 昭夫	広島大会現地実行委員会	大久野島戦争遺跡保存活動の歩みと今後の課題
3	和田千代子 田中 寛	731部隊遺跡世界遺産登録を目指す会	731部隊遺跡の世界遺産登録に向けての経緯と現状報告
4	西尾 良一	戦跡保存全国ネットワーク	新重文指定の出雲日御崎灯台は、戦争遺跡です
5	出原 恵三	戦跡保存ネットワーク高知	四国西南部の特攻基地跡 一第132震洋隊・土佐清水市越基地跡を中心に一
6	山田 譲	戦跡保存全国ネット	川崎市宮前区に残る陸軍東部62部隊の戦争遺跡

【第2分科会（調査の方法と整備技術）】

No.	氏名	所属団体	レポート題名
1	工藤 洋三	戦争遺跡保存全国ネット	下関市蓋井島の白瀬防備衛所について
2	平川 豊志 春日 みわ	松本強制労働調査団	松本歩兵50聯隊関連遺跡 一射撃場跡を中心に一
3	中田 均	浅川地下壕の保存をすすめる会	あらたな記録・伝承方法として3次元モデル
4	橋 尚彦	戦争遺跡保存全国ネット	旧真田山陸軍墓地の現状と地域史史料としての墓碑銘文
5	西嶋 拓郎 森 操 村居 一貴	戦争遺跡保存全国ネット	香芝・屯鶴峰地下壕上の建物跡3か所確認・調査! 「本土決戦」の戦闘指令所か?
6	高谷 和生	くまもと戦争遺跡・ 文化遺産ネットワーク	遙拝遺構を考える

【第3分科会（平和博物館と次世代への継承）】

No.	氏名	所属団体	レポート題名
1	松樹 道真	NPO 松代大本營平和祈念館	見学者のためのリーフレット作りとコロナ 一小中学生用と外国人用
2	北原 高子 金 穂実	NPO 松代大本營平和祈念館	迫られるガイド増員への対応
3	田中 剛	日吉台地下壕保存の会	戦争遺跡の教育的活用の取り組み ～日吉台地下壕見学会の例から～
4	芹沢 昇雄	NPO 中帰連平和記念館	赦された戦犯たち

現地見学会報告

「呉の軍都遺跡、地下壕巡り」に参加

運営委員 岡本雅之

戦争遺跡保存全国シンポジウム広島大会の現地見学会（8月22日）に参加した。この現地見学会は次の四つのコースが設定されており、①「広島市内軍都・被爆遺跡巡り」②「太田川上流の朝鮮人労働、強制連行中国人労働によるダム建設と補償・和解の取り組みを学ぶ」③「平和記念公園と周辺の被爆遺跡・碑を巡る」④「呉の軍都遺跡、地下壕巡り」それぞれ参加者が事前に希望コースを選択した。

私の参加した「呉の軍都遺跡、地下壕巡り」コースは参加者38名で日吉台地下壕保存の会の仲間も数名参加した。45人乗りのバスはほぼ満員の盛況で、予定通り広島駅前を8時30分に出発、五か所を廻り13時10分呉駅到着、その後広島駅帰着14時の予定。

案内はピースリンクで長年活動されているN氏、M氏のお二人でこれらの事象に詳しい大ベテランである。29ページにわたる資料「ようこそ 呉フィールドワークへ」を配布された。

呉市は元勤務先の製鉄所所在地で、現役時代には年数回出張で訪れていたなじみの都市である。当時は「大和ミュージアム（呉市海事歴史科学館）」を数回見学したくらいで、他の戦争遺跡については全く知識もなく、今回の訪問地は殆んどが初めての場所で期待していた。又、私事だが、来年9月に閉鎖予定の日新製鋼呉製鉄所高炉を最後に見ておきたいとの思いもあった。

まずは①「長浜地下工場」へ向かう。途中、車窓からの、「旧陸軍被服支廠」の建物やマツダの工場内にある真っ黒に塗られた建物「陸軍運輸部船舶司令部」の説明を受けた。1時間弱で到着。海岸沿いの山のふもとにかなり大きな入口がある。当然、普段は施錠されていて立ち入り禁止。この壕は広（ひろ）海軍工廠の地下工場。はつきりとはわかっていないが航空機の部品を、動員された学徒や女子挺身隊の若い人たちが組み立てていたようだ。呉の市街電車がすぐそばまで通っていて工員たちが通勤していたとのこと。

中は真っ暗、懐中電灯の明かりをたよりに、ガイドのN氏の案内で見学。かなり大きな壕でコンクリートの構造物等が残っている。40分程度の見学、往復500m？程度を歩く。出入り口の道路を隔てたすぐ前が海で、右側すぐに小さな公園がある。

②長迫公園・旧呉海軍墓地。ここは旧海軍軍人・軍属の埋葬地として1890（明治23）年に海軍が設置した墓地。個人墓碑157基、英國水兵墓碑1基、戦没者合祀・慰靈碑91基がある。入口すぐに「戦艦大和戦死者の碑」がありひときわ大きく目立っている。軍艦ごとの

慰靈碑が多く、なじみの艦名の碑もたくさんある。それぞれ大きく立派な碑である。墓地というよりもそれぞれの軍艦の戦歴を誇り武勲を称えるという碑が多いように思った。慰靈碑の多くは1965年以降相次いで2002年までに建立されているとのこと。30分程で急いで全体を巡ったが軍讚美の意を強く感じた。英國水兵の碑は、1907年宮島沖で転落して亡くなった19歳の水兵の葬儀をここで行い墓碑を建立したこと。1902年の日英同盟、日露戦争～1905年後の時代背景があったのだろう。

③和庄児童公園・供養塔。ここは1945(昭和20)年7月1日～2日の呉市街地空襲で800人の市民が亡くなった防空壕のある場所とのこと。呉市街地空襲など、「この世界の片隅で」で知る程度の知識の私には全くの初耳である。この一帯はたくさんの横穴式防空壕が掘られ、ここは最大6000人を収容できる巨大なものにする予定であったそうだ。工事には多くの朝鮮人が従事させられ、つらい作業をやらされたという証言もある。

四つの横穴式壕が完成し住民用の防空壕としては最も良いものだと羨望された。人々も安全だと信じて逃げ込んだのだが、防空壕の入り口近くにあった家屋の猛烈な火災のため、壕から外に出ることができず、内部には熱と煙が吹き込んで、酸欠と蒸し焼き同然になって死んでいったという。悲惨な話である。人々の靈を慰めるため地蔵尊と供養塔が1963(昭和38)年に建立された。我々見学者も黙祷をささげ犠牲者の冥福を祈った。

④歴史の見える丘 宮原五丁目「子規句碑前」バス停の山側に呉海軍工廠ドック群を見下ろす小さな公園がある。バスを降りてまずは歩道橋に上り、目の前の「戦艦大和を建造したドック」を見る。1911(明治44)年3月に完成。長さ270m・幅35m・深さ13m。大屋根の鉄骨は当時のままだそうだが、地下部分は埋め立てられているとのこと。

その隣のドックには、なんと「護衛艦・かが」が入っていた。こんなところで一般の人々の目に触れていいのだろうか。憲法違反の「航空母艦」に改造されそうなこの艦をおおっぴらに見せるというのは如何なものだろうか。

その後、「歴史の見える丘」に戻りN氏の説明を聞く。呉市のたてた掲示板には、眼下に見える旧呉海軍工廠の風景と、建造した代表的な軍艦名が表示されており『工廠で働いた幾十万の人々の心と技術、並びに旧海軍施設は、今日の平和産業港湾都市「呉」として生き続けている』と記述されている。「大和」に象徴される技術が現在の呉をつくったのであり、ここがその歴史を一望できる場所であるとしている。

海軍工廠の一部の払い下げを受け製鉄所を建設した会社の元社員の一人として、この呉市の主張はよくわかるが、「大和」は軍艦であり沖縄戦での水上特攻で3332人のうち3056人の死者を出した戦闘艦である。「大和」の技術的側面だけでなくアジア・太平洋戦争に果たした呉の役割を考えると、大和=技術力讚美は、如何なものかと感じる。

ここには「噫(ああ) 戦艦大和塔」という大和の艦橋をかたどった塔もあり(1968(昭和43)年第30回の大和進水の日を記念して建てられた)、主砲の徹甲弾も展示されていた。(この主砲弾はわが社の製鉄所正門前に飾られていて見慣れたものであった。)

⑤海上自衛隊Sバース(潜水艦桟橋)
バスは桟橋に行く前に坂を上がってすぐの駐車場に止まり、付近を歩いた。この付近には技手(ぎて)養成所、職員教習所、工員養成所があった。海軍技手養成所は1919(大正8)年3月横須賀で設立、翌年10月呉海軍工廠には造兵職工教習所が設立されていたが、1928(昭和3)年3月、横須賀から呉に移り、開所した。(これにより造兵職工教習所は廃止。)ここに記念



呉軍港 駆逐艦いなづま、掃海母艦ぶんご、駆逐艦うみぎり

碑、「海軍技手養成所跡」1996（平成8）年11月。「呉海軍工廠職工教習所・工員養成所跡」1998（平成10）年5月）が建立されている。その碑を道路に沿って少し上がったところにコンクリートのがっしりした防空監視所が残っていた。

そこからしばらく下ると潜水艦桟橋に出る。ここは「アレイからすこじま」と呼ばれ国内で唯一、潜水艦を間近で見ることのできる公園である。この時も数隻の潜水艦（どれも同じに見えたが…）を見ることができた。向かい側にはレンガ造りの倉庫群があり、海軍工廠の前身である呉海軍造兵廠時代、1897～1903年（明治30～36年）に建てられたものである。

軍港時代に使われた魚雷積載用のクレーンが昔のままの姿でモニュメントとして残されていた。現在では魚雷専用のトラックが各潜水艦桟橋まで運び、クレーンで搬入しているとのこと。うまくタイミングが合えば魚雷搭載作業を見ることが出来るそうだ。

ここで配布資料の「艦艇配置表」の説明あり。艦隊別、地域別（横須賀・呉・佐世保・舞鶴・大湊）の艦艇一覧表である。昔、雑誌「丸」の愛読者であった私にとってはとても貴重な資料となった。ここでツアーチャンプを終了し呉駅経由で広島駅に戻ることとなる。

総じて期待通りのフィールドワークであった。軍都としての呉の歴史とアジア・太平洋戦争の時代の遺跡にふれ、充実した半日であった。「この世界の片隅で」をまたしっかり観ようと思う。

以上

追記 宇品「陸軍船舶司令部」跡を訪ねる

呉のフィールドワークの前日（8月21日）の午後、暑いさなか、宇品を歩いた。全く土地勘はなく、広島駅の観光案内所で「南区散策ガイド、宇品・元宇品マップ」を手に入れ、駅前から路面電車に乗る。観光地図によると宇品中央公園に旧陸軍関係の史跡がいくつか残っているようだ。市電を下り、地図に従って10分程歩き、道路沿いに「宇品陸軍糧秣倉庫跡」を見つけた。壁の一部が残されていた。

すぐ裏の草ぼうぼうの空き地に入る。ここが宇品中央公園である。少し歩くと搜すまでもなく「凱旋館記念碑」、すぐそばに「旧跡陸軍運輸部船舶司令部の碑」を見つけた。凱旋館碑には「宇品凱旋館建設祈念碑 皇紀二千六百年 昭和十五年二月十一日 陸軍中将田尻昌次書」と刻まれている。

そこから海へ向かって少し歩くと「旧陸軍桟橋跡」に出る。かつてここに、陸軍の一大軍事基地があり「船舶の神」と呼ばれた軍人がいたことが偲ばれる。詳細はふれないが、興味のある方は『暁の宇品』…陸軍船舶司令官たちのヒロシマ…堀川恵子著 を参照して頂ければと思う。

戦争遺跡見学

毒ガス兵器とウサギの大久野島を訪ねて

運営委員 山田譲

戦争遺跡保存全国ネット広島大会のあと、私は8月23日に広島県東部の大久野島に行ってきました。当会の喜田さんと、みやまえ・東部62部隊を語り継ぐ会の山本太三雄さんと3人です。私が大久野島に行きたいと思ったのは、瀬戸内海の海軍補給工場跡地に残る「特薬庫」（毒ガス弾庫）の隣の煙突基礎構造と、似た配置の「毒物焼却場」隣の「煙道口」を見たいのと、毒ガス兵器のことを知りたいからでした。

《毒ガス製造工場の島、毒ガス資料館の展示》

22日の呉フィールドワークのあと呉鎮守府司令長官官舎を見て呉で1泊し、翌朝、私たちはJR呉線に乗って忠海駅で降り、船で大久野島に向かいました。島に近づくと何やら灰色の大きな建物が見えてきました。「発電場」跡でした。島の第一桟橋の先には、さっそく幹部用防空壕跡が道路わきにありました。コンクリート製で出入口が2つ、長さ5mの半地下式の壕です。

さらに行くとビジターセンターで、その向かい側に大久野島毒ガス資料館があります。ここは1988年設立で竹原市が管理運営しています。初代館長は毒ガス工場に勤務していた村上初一さんでした。展示室には陸軍がここで毒ガス兵器を作っていた歴史と、戦後の米軍による毒物廃棄・処分状況が写真や地図で説明されていました。実物資料も多く、毒ガス剤の製造装置の部品、防護服、毒ガス砲弾、投下弾（爆弾）などが展示され、また屋外展示場にも製造装置部品が置かれていました。

1929年に陸軍造兵廠火工廠忠海兵器製造所として開所して以来、大久野島で作られていた毒ガス剤はイペリット、ルイサイト、デフェニールシアンアルシン、青酸、塩化アセトフェノンでした。これらを陸軍では黄、赤、茶、緑剤（弾）と称していました。ここで大量製造し貯蔵した毒ガス剤を北九州市曾根分工場で砲弾、爆弾に充填し、毒ガス戦の訓練は千葉県の習志野学校で行なっていたそうです。

そして中国で実戦使用されました。しかしこれは国際法違反ですから「秘密戦」でした。それで陸軍参謀総長の載仁親王は昭和13年4月11日付の「大陸指（大本営陸軍部指示）第110号」で「あか筒軽迫撃砲用あか弾を使用すること」「使用地域山西省」「使用法 勉めて煙を混用し敵にガス使用の事実を秘匿しその痕跡を残さざる如く注意するを要す」（原文はカタカナ書き）と命じています。この「あか弾」は刺激性くしゃみ剤で致死性ではありませんが、呼吸障害をおこし動けなくなったところを防毒面を付けた部隊が突入し皆殺しにするという戦法でした。

また展示にはありませんでしたが、『大久野島の歴史』『おおくのしま平和学習ガイドブック』（大久野島から平和と環境を考える会発行、山内正之著・監修）によると、河北省北坦村では村民800人以上が毒ガスで殺傷されました。1942年5月27日のことです。

《島の各所に毒ガス工場の廃墟と砲台跡》

私たちは、次に休暇村大久野島で自転車を借り、島の海岸沿いに右回りで1周しました。島のあちこちに廃墟になった毒ガス工場の遺跡があります。また明治時代に造られた砲台跡もあります。砲台は石積・レンガ造りで横須賀の観音崎砲台群とよく似た造りでした。しかし瀬戸内海に砲台は不要となり、大砲は撤去されました。

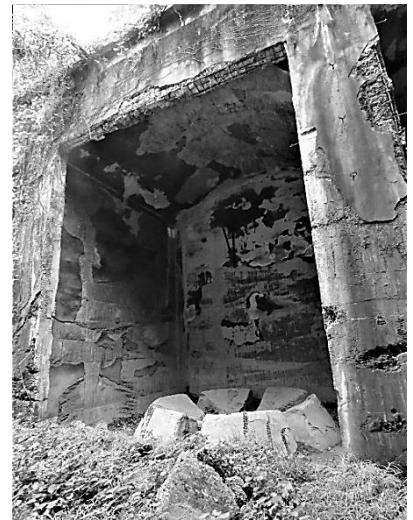
休暇村の建物のすぐ左隣には、三軒家毒ガス貯蔵庫跡があります。コンクリート製の横穴の中に、円筒形のタンクを横向きに置くための台座があります。説明板によればタンク1つに10トンの毒液を貯蔵し、合計80トンのイペリット、ルイサイトが貯蔵できました。

その先の崖地の中にもコンクリート製の横穴が並んでいます。さらに行くと「毒ガス工場時代トイレ跡」という表示のある遺構があります。片側に小便器の跡、反対側には陶器製の大便器が損傷なく並び、便器の下は空洞で汲み取り式でした。日吉の海軍とは違いますね。

次に見たのが長浦毒ガス貯蔵庫跡です（右写真参照）。ここは巨大な毒液タンクを6基立ててあった場所です。山裾の崖を掘りすすめてコンクリート製のタンク格納庫を左右に3つずつ配置しています。タンクは直径4m、高さ11m、容量85トンです。中身はイペリット、ルイサイトで、円筒形のタンクを立てて置くための台座は独特の形をしています。これを収める格納庫の高さは3階建の建物ほどで、その大きさに驚きました。

《毒物焼却場跡につながる煙道口は3つ、中に丸い煙道が開口》

島の北部に行くと道は海岸を離れて山道です。この山道の上り口の右側に煙道口が3つあ



長浦毒ガス貯蔵庫跡



北部砲台砲座の毒ガスタンク台

りました。コンクリート製の縦長の四角い穴が開いています。説明板はなく網フェンスが立てられています。のぞいてみると直径30cmほどの丸い穴が、山の斜面に沿って上に向かって開いていました。道路の左側(北側)には毒物焼却場があったということなので、その煙をこの煙道に誘導して山の上の方に排出していたわけです。先に紹介した本によれば、この煙道の出口の穴は今も山の上に残っているそうです。また煙の出口には元は2~3mの煙突があったそうです。

焼却場と煙道口を隔てる道路は戦時中からあったようです。そうすると、ここはどのようにつながっていたのか、気

になるところです。それで煙道口の下の方をのぞいてみると、道路側の下の方が開いているようでした。はっきり確認できませんでしたが、道路の下にも煙道があったのかもしれません。それはともかく、煙道口と煙道を確認できました。

煙道口の先を登っていくと右側に北部砲台跡があります。ここには24cmカノン砲が4門と12cm速射カノン砲が4門ありました。その後、この砲座の一部は毒ガス剤・ルイサイトの貯蔵タンクの置場となり、円筒形の大型タンク2基を横向きに置くための台座が今も残っています(左上写真参照)。



大久野島のウサギ

《巨大な発電場の建物の中では風船爆弾の補修作業も》

道を進むと下り坂になり海岸沿いにもどります。島の東海岸です。ここに3階建相当の大きなコンクリート製の建物があります。来るときに船から見えた灰色の建物です。外観の窓は3階建に見えますが、中は吹き抜けで大きな空間になっています。

ここはディーゼル発電機8台があり島内の工場・貯蔵庫に電気を供給していました。それだけでなく戦争末期には、この巨大な空間を利用して風船爆弾の気球の満球テストをして穴があったら補修していたそうです。神奈川県の登戸研究所と大久野島が毒ガスばかりでなく、風船爆弾でもつながっていたとは思いもよりませんでした。

私たちはこの後、休暇村にもどり自転車を返して今度は南部砲台跡に向かいました。途中には研究室跡の木造建物があり、これは倉庫として今も使われています。山道を登っていくと何もない広場があり、そこには技能者養成所跡という表示がありました。さらに登っていくと南部砲台跡です。ここには8門の大砲があったそうです。快晴で見晴らしがよく、暑いのですが木陰には涼しい海風が吹いていました。

私たちは下に降りて帰りの船の時間まで木陰で涼んでいました。するとウサギたちが近寄ってきてエサをねだります。売店で買ったウサギ餌を手から食べるし、さわっても逃げません。毒ガス工場があった時にも動物実験用にウサギを飼っていたようですが、その子孫ではないそうです。戦後に忠海小学校から休暇村がウサギをもらってきて飼い始めたのが元になっているそうですが、さだかではありません。大久野島はウサギ島としても有名です。

ということで、船に乗って島をあとにしましたが、こんなに戦争遺跡だらけの所は他にないと思います。しかも、ここはまさしく加害の戦争遺跡です。ここで働いていた人たちは毒ガス、毒物にさらされ大きな被害と後遺症に苦しみました。そういう被害の側面と、中国への残虐な侵略とが表裏一体だということを、異様な廃墟群が重く訴えているようでした。

他方、戦後の毒ガス剤の海洋投棄、島内埋設処分、焼却の有様もおそろしいばかりです。さらに米軍はこの島を朝鮮戦争では弾薬庫として使いました。米軍は毒ガス兵器を保有し朝鮮戦争で使用しましたから、その保管場所だったのかもしれません。今の化学兵器はさらに「進化」し、世界中にあふれています。ロシアはシリアの住民を毒ガスで殺戮しました。ウクライナのマリウポリ地下壕攻撃でも使おうとしました。毒ガス島は現在も進行形です。

報告

第34回日吉台地下壕保存の会・定期総会

前号150号に議案書を掲載し、会員の皆さんに提案いたしましたところ、どなたからもご異議やご質問はありませんでした。従いまして議案は成立となりましたので、今号151号に第34回総会報告として掲載いたしました。ご了承くださるようお願い申し上げます。

☆2021年度活動報告

- ◇会員数：個人242名 会報の交換・寄贈団体：95団体
- ◇第32回定期総会：2021年6月18日(金)発送の会報146号にて議案書提出
2021年8月25日(水)発送の会報147号にて議案書ご了承の報告
- ◇運営委員会開催：2021/4～2022/3 8回
- ◇会報発行：4回 146号(2021.6/18)～149号(2022.3/18)
- ◇地下壕見学会：2021/4～2022/1 13回 408人
- ◇ガイド学習会：

2021/3 日吉地区センター 中集会室
2021/5 日吉地区センター 中集会室
2021/7 日吉地区センター 和室
2021/9 日吉地区センター 中集会室
2021/11 日吉地区センター 別館1号室
2022/1 日吉地区センター 中集会室

- ◇第26回2021平和のための戦争展 in よこはま：神奈川県民センター2階 ☆展示無し

5/23(日) 特別企画1 戦争・空襲 (参加者240名)・朗読劇「少女たちの戦争—横浜大空襲」横浜市立日吉台中学校演劇部・報告「5月29日野毛山で一どう逃げ惑ったか」NGOグローカリー・講演「江戸から見る」田中優子さん
5/30(日) 特別企画2 核のない世界を (参加者160名)・発表「探求：核兵器禁止条約」桐蔭学園高校・中等教育学校演劇部・講演「被爆者の願いが条約になった」和田征子さん・「核兵器のない世界に向けて—条約の可能性と課題」山田寿典さん・「非人道兵器を禁止させたもの—地雷廃絶の経験から」日加田説子さん

- ◇PowerPointチーム会合：日吉地区センター 6/19(土) 7/17(土) 8/7(土) 10/16(土)
- ◇出張授業 2021.10/16(土) リハーサル(中原市民館1階フリースペース)
2022.3/10(木) 小学校への出張授業 日吉台小学校6年生71名3クラス
5時間目PowerPoint画像を使ってリモート授業を行った ガイド4名
- ◇6/29(火)、7/1(火) 慶應義塾大学設置講座「日吉学」研究発表を傍聴(来往舍シンポジウムスペース)
- ◇8/16(月) ヤフーニュースに取材記事(対応 阿久沢会長)
- ◇10/2(土)、3(日) 第24回戦争遺跡保存全国シンポジウム東大和大会(東京都東大和市)「コロナ」の影響下、昨年は中止となり、今年「リモート」で開催 2日、3日

☆2022年度予算(単位：円)

費目	2022年度予算	備考
【収入の部】		
会費	300,000	
見学会資料代	500,000	
図書等頒布	100,000	
寄付金等	0	
繰越金	294,954	
合計	1,194,954	
【支出の部】		
運営費	160,000	各種会合・打ち合わせ等
事務費	120,000	事務用品費等
印刷費	100,000	会報・資料等
通信費	300,000	会報送料等
図書資料費	100,000	参考書籍・販売書籍
交流・交通費	100,000	全国集会・各平和展賛助金等
謝礼	80,000	講演・学習・調査等
冊子作成費	200,000	
予備費	34,954	
合計	1,194,954	

収入の部の会費は前年度実績をもとに計上しました。
2022年6月17日 日吉台地下壕保存の会・運営委員会

(全体会・分科会)の両日共、約100名が参加

◇11/29(月)「日吉台地下壕の史跡・文化財指定に関するお願い」を慶應義塾に提出

◇2022.2/26(土)定例見学会再開に向けてガイドの練習会(ガイド10名で感染防止対策

見学ルート・時間の確認 見学者の募集は無しで実施)

2021年度 決算報告

(単位 円)

費目	2021年度予算	2021年度決算	備考
【収入の部】			
会費	300,000	225,072	175名
見学会資料代	500,000	0	
図書等頒布	100,000	0	
寄付金等	0	21,500	
ガイド講座受講料	0	0	
繰越金	390,836	390,836	
計	1,290,836	637,408	
【支出の部】			
運営費	160,000	56,294	各種会合・打ち合せ等
事務費	120,000	37,973	事務用品費等
印刷費	100,000	41,800	会報・資料等
通信費	300,000	191,407	会報送料等
図書資料費	100,000	5,980	参考書籍・販売書籍
交流・交通費	100,000	9,000	全国集会・各平和展賛助金等
謝礼	80,000	0	講演・学習・調査等
冊子作成費	200,000	0	
予備費	130,836	0	
小計		342,454	
差引残高		294,954	次年度繰越金
計	1,290,836	637,408	

以上の通り報告します。

2022年5月30日

日吉台地下壕保存の会

会計 亀岡 敦子



この報告により収支を監査したところ、適正に処理されていることを認めます。

会計監査 熊谷 紀子



会計監査 山口 園子



☆2022年度日吉台地下壕保存の会
運営委員・会長・副会長・会計監査・顧問

会長 阿久沢 武史

副会長

亀岡 敦子

喜田 美登里

羽田 功

運営委員

石橋 星志

上野 美代子

遠藤 美幸

岡上 そう

岡本 秀樹

岡本 雅之

岸本 正

小山 信雄

佐藤 宗達

佐藤 由香

田中 剛

谷藤 基夫

福岡 誠

宮本 順子

茂呂 秀宏

山田 譲

山田 淑子

渡辺 清

会計監査

熊谷 紀子

山口 園子

中沢 正子

顧問

櫻井 準也

鮫島 重俊

☆2022年度 活動方針

ロシアがウクライナに侵攻し、私たちが生きるこの世界で国家間の戦争が起きています。破壊された都市、近親者の亡骸を前に立ち尽くす人々、地下シェルターでの不自由な生活、小さな子供を連れて隣国に避難する母親、長い人生で再び大きな戦争に巻き込まれた高齢の人たち。ニュースで目にするこうした現実を前に、戦争遺跡の保存に関わる私たちの活動は、これまでにない緊張感を伴うものとなっています。

私たちができることは限られていますが、この会が30年以上にわたって積み重ねてきた活動を、コロナ禍であっても着実に続けていくことに意味があります。一般向けの定例見学会は、限定的な形ではありますが、再開することができました。引き続き感染防止対策を徹底しながら内容を充実させ、定例の回数を月2回に戻せるように努力します。学校関係の見学会は、いわゆる「出張授業」を含め多様な方法を工夫して、各校の平和教育や歴史教育への取り組みに積極的に協力します。最も大きな課題である日吉台地下壕の文化財・史跡指定については、昨年秋に始めた慶應義塾への働きかけを粘り強く継続します。

今年度の活動も依然としてコロナ禍の中にあることが想定されますが、活動方針および予算案は例年と変わらない内容とし、以下のように提案いたします。

活動方針

- 文化財指定早期実現を文化庁・神奈川県・横浜市に働きかけ、地下壕を保存する。
- 慶應義塾・横浜市・神奈川県・国への働きかけを、港北区民をはじめとする地域住民と協力して行う。
- 小・中・高校生及び広く一般市民などに対して平易でわかりやすい見学会を実施する。
- 戦争遺跡保存全国ネットワークの会員団体として、全国的な保存活動に参加する。
- 日吉台地下壕見学会の内容をより充実させるために、ガイド養成講座・講演会・学習会を開催し、運営する。
- 横浜・川崎平和のための戦争展を開催する。
- 神奈川県内の他団体と連携し、日吉台地下壕についての展示や講演を行う。
- 日吉台地下壕の調査・研究を深める。
- 運営委員会の活動をより一層充実させる。

報告

「第27回平和のための戦争展 in よこはま」(後半7/15~17)

—「核のない世界を」テーマに特別企画、3年ぶりに展示も

事務局・本会会員 吉沢てい子



カテリーナさんによる歌と演奏

横浜大空襲から77年、被爆77年。「第27回平和のための戦争展」の後半の企画「特別企画2」と展示を7月15日から17日までかながわ県民センターで開催しました。

いま、世界には、1万数千発の核兵器があり、ウクライナでの戦闘の中で、核使用の危機にさらされています。7月16日の「特別企画2」のテーマは「核のない世界を」。広島平和文化センター理事長や平和首長会議事務総長など歴任された小溝泰義さんは核兵器禁止条約の意義と核廃絶の道筋を講演しました。「国際的緊張の高まったときこそ、指導者が歩み寄る」—キューバ危機後の核実験禁止条約の例を紹介し対話の重要性を訴え

ました。8月ニューヨークでのNPT再検討会議に参加予定の横浜市原爆被災者の会会長の和田征子さんは被爆者が命あるうちに核廃絶の実現を願って続けてきた活動を報告し、いま核使用の危機の中で新たなヒバクシャを生み出してはいけないと訴えました。KNOW NUKE TOKYO代表で慶應大学4年の高橋悠太さんは被爆者証言会や提言活動、国会議員へのアンケート、ウイーンでの核兵器禁止条約第1回締約国会議に参加した体験を報告。「なぜ、若い世代が行動するのか、大人たちが決めた未来・地球環境の中で影響を受けるのは若い世代。核廃絶のための若者の活動を支援してほしい」と要請しました。チェルノブイリ原発のそばで生まれたウクライナ出身のカテリーナさんは、戦争が早く終わってほしいと願い、「子守歌」や「翼をください」を歌いバンドウーラを演奏しました。

3年ぶりの展示は7月15日から17日まで開催。横浜大空襲から77年、猛火の横浜、焼け跡の市街、空襲体験画、横浜の戦跡、日吉台地下壕と瀬谷海軍補給工場、野島掩体壕、船と戦争、アジアでの戦争、教科書、占領下の横浜、横浜・沖縄の米軍基地、沖縄日本復帰50年、米軍機墜落事件から45年、被爆77年、憲法、平和のバラ、WFPなど展示しました。

7月17日には戦争遺跡の展示に関連し、横浜市史資料室調査研究員の羽田博昭さんが「横浜の旧日本軍施設」を講演しました。

悲劇を忘れず繰り返さず、戦争のない核も基地もない、命・環境・地球が大切にされる世界をどのように築いていけるか、戦争展が平和な未来のために若い人たちとともに考える機会になったのではないでしょうか。

選択旅行

「日吉台地下壕フィールドワーク」報告

会長 阿久沢武史

慶應義塾高校ではコロナ禍の中で宿泊を伴う旅行行事を中止し、かわりに神奈川県内のワンデイトリップのコースを複数作り、生徒が自由に選択する形にしました。その中に地下壕見学も入れ、半日のコースとして7月13日（水）午前午後の2回実施しました。参加人数は感染防止対策から少人数とし、それぞれ25名です。少人数でガイドとの距離も近く、有意義な学びの機会となりました。

見学のルートや内容は通常の見学会と同じですが、最後に第一校舎の中を歩き、上原良司の「所感」を読む機会も設けました。参加者は次のテーマで感想文を書き、各自で振り返りました。

- ①キャンパスの戦争遺跡を歩いて、感じたこと、考えたことをまとめなさい。
- ②上原良司「所感」を読んで、感じたこと、考えたことをまとめなさい。

ここではその中からいくつかご紹介します。高校生がどのようなことを感じ、考えたか、お読みいただきたいと思います。

①について

A)この地下壕を歩いて僕が感じたことは主に二つあります。一つ目は、戦争が当たり前だった時代があったということです。僕は今、平和が当たり前の時代に生きていて、戦争は異



展示会場（かながわ県民センター）

常なものだと考えてきました。ただ、地下壕で行われていたことの生々しい説明を受けて、その時代の人たち、特に子供たちは戦争が日常だったということを痛感させられました。きっとその時代の子供たちは終戦したとき、「ああ、戦争は終わるものなんだ」と驚いたと思います。今の私たちにも同じことが言えるでしょう。生まれてからずっと平和の中で生活してきた私たちは、きっと「ああ、戦争が始まってしまった」と驚くに違いありません。このように、戦争の状態と平和というものは紙一重なのであり、かならずしも絶対的なものではなく、人々の環境、感覚に左右される相対的なものだと思いました。二つ目は、私たちが普段通っている学校全体がこのような重大な遺跡であったということです。私は説明を受けるまで校舎の前のカップや、玄関のタイルの意味、イタリア半島にある寄宿舎の存在を知りませんでした。しかし、そのすべてにそれが作られた、利用された当時の意図、意味合いが込められており、また新しい視点で学校に毎日通うことになるだろうと感じました。例えば、あの寄宿舎は、70年以上前は軍の徴用施設だったわけで、きっと大きな存在感を放っていたのだろうと思います。しかし、戦争が終わってその意味合いが失われると、多くの人々からは忘れられ、今は一部が廃墟のようになっていました。この時の流れ、そして忘れられることはたとえその遺跡がどれだけ堅牢であっても打ち消してしまうものであり、その破壊力はすさまじいものだと感じました。

B) 戦争遺跡の見学ということで厳粛な態度で臨んだものの、この地下壕の建設がサイパン島陥落の直後に始まったということを知って一層心が重くなった。敗戦色濃厚でいよいよ本土が空襲の危険に晒された状況下、当時の軍人の心境を察するといったまれない。通信室には戦艦が撃沈する時も特攻機が敵艦に突撃していく最中もその通信を受信していたと、まさにその場で説明を受けたが、近代戦争を学ぶ際にここまで臨場感を感じたのは初めてだった。長崎の原爆資料館などには行ったことがあったが、内部が多少改裝されているとはいえ本物の遺構そのものに直に触ることは強烈且つ新鮮だった。敗戦に一直線に突き進む当時の人々の絶望感が、時を越えて感じ取れた気がした。

②について

C) この文章を読んで、私が考えたことは主に二つあります。一つ目は、個人を機械のように扱い、全体の国家の一部分のように見なす考え方の恐ろしさです。今のウクライナの戦争にも同じことが言えるかもしれません、全体のために一人一人に犠牲を強要することは、とてもむなしいものであり、本末転倒であるということ、そしてかつて、思想が厳しく統制された戦時中にも、同じようなことを考えていた若者が沢山いたということに気づかされました。さらに、これを書いている人物が、その強いられた犠牲のために、死なんとしているという事実も、この内容をより重みあるものにしていると思います。国を守るためにという大義名分は理解できますが、そのために国の大切である国民、ましてやこれから未来を背負っていく若者を戦場に送って、むげに死なせることは、とても罪深いことだと思います。二つ目は、この文章のようなことを考えていた人がやはり数多くいて、戦争に従事した一人一人の人が、目的以上の感情、理性を持っていたということです。私の祖父の兄は、戦争で亡くなつたと聞いています。話がわずかにしか残っていないので、わからないところが多いのですが、それでも、もしかしたら祖父の兄も、この文章のように何か考えるところがあつて、戦死したのだと思うといったまれない気持ちになります。やはり、そんな人間一人一人を機械のように使い捨てるることはあってはならないと思いました。

D) 当時の情報が規制され、天皇至上主義の世の中で上原良司さんのように自由主義という思想を持ち、権力主義や全体主義の枢軸国などは必ず敗れるということを見抜いたことに衝撃を受けました。自分の中では当時の日本は洗脳されているような状況にあって、特に

普通の人々は考える自由を与えられていないくて、全員が同じような思考を持っていると思ってました。この人のような思考を持った人が公に意見を出せなかつたのもあると思いますが、自分はこの人の思考にはこの学校の自由さが影響していると思います。平和な今の日本では失われかけている当たり前のことを当たり前と思わないという精神がこの人には養われているんだなと感じました。自分は、現在のウクライナ情勢や安倍首相の銃殺などの中、この当たり前のことを当たり前と思わないという精神をこれからも培いたいと思いました。

Aの生徒が言う「忘れられることの破壊力のすさまじさ」、Bの生徒が言う「臨場感」「時を超えて感じ取れる」は、戦争遺跡の保存と活用の本質に関係すると思います。Cの生徒は上原の言葉から自分の家族の歴史(ファミリーヒストリー)に引き付け、Dの生徒は「当たり前のことを当たり前と思わない精神」について言及しています。他人事ではなく自分自身の問題として考えること、日常の生活や社会を疑う態度、これらは世の中で起こるさまざまな事象を客観的に見つめる態度につながっていくと思います。あらためて戦争遺跡の教育的活用の意義について、考えさせられます。

連載

海外戦跡めぐり (21) ホテル便り(中)

ホテル・マジャパヒト インドネシア

運営委員 佐藤宗達

1869年スエズ運河が開通すると欧洲—アジア間の人・物の流れが急激に拡張した。それに伴いホテルの需要も高まりアジア各地にホテルが建設された。蘭印(オランダ領東インド現インドネシア)にも1910年スラバヤにホテルオランジェが開業した(1992年ホテル・マジャパヒトに改称)。ヴィクトリア様式で建てられ、二階建ての建物は奥に広く、中庭には噴水が配置されており現在もコロニアルホテルの原型を感じさせている。1942年日本軍は蘭印に進攻、オランダ軍は豪州に撤退した。日本軍はホテルオランジェを接収、ヤマトホテルに改称、軍人・軍属の宿泊ホテルとし、一部にはオランダ兵の家族を軟禁・収容した。日本軍は蘭印を占領すると、オランダ植民地政府に囚われていたスカルノ(後に初代大統領)、ハッタ(同副大統領)らを解放し、日本軍の統治下での民生の安定のため、知名度の高いスカルノら民族主義者に、日本軍による占領への協力を要請した。

スカルノらは民衆総力結集運動を組織し、独立のために日本軍に協力し、連合国軍と対峙することを選択した。しかし日本軍は当初から蘭印を帝国領土と決定し重要資源の供給源として極力之の開発並びに民心の把握に努める方針であり、1943年11月に開催された大東亜会議には蘭印は招待されなかった。その後日本軍は劣勢となり1945年日本軍は独立を認め

る方針をとり8月12日ヴェトナム・ダラットにある南方軍司令部にジャカルタからスカルノ、ハッタを呼び独立を承認することを伝えた。

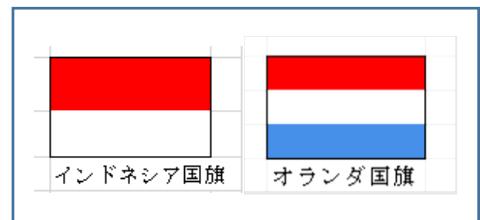
ジャカルタに戻ったスカルノらは独立宣言書を準備し8月15日日本の敗戦。スカルノは8月17日ジャカルタでインドネシアの独立を宣言した。一方スラバヤでは9月19日ヤマトホテルの屋根の上にオランダ国旗が翻った。ヤマトホテルに軟禁・収容されていたオランダ人の解放を宣言して掲げたものである。翻るオランダ国旗を見たスラバヤ市民は怒り、青年たちは屋根に



ホテル・マジャパヒト

※マジャパヒトはインドネシアの古い王朝名

登りオランダ国旗を破った。オランダ国旗は赤・白・青の三色のストライプである。一番下の青をとればインドネシア国旗となる。青の部分を破り捨て、「メルデカ」(自由を)と叫んでインドネシア国旗として翻した。この国旗掲揚事件によりこのホテルはインドネシア独立の象徴となり、ホテルの入り口の脇には由来を刻んだプレートがあり、ロビーには国旗掲揚事件の絵画がかかげられてある。



報告 地下壕展示会と講演会 運営委員 小山信雄

今回、初の試みとして“日吉の本だな(日吉図書取次所)”にてパネル展示会を行いました。日吉の本だなは、今年1月に慶應義塾大学日吉キャンパス内(協生館1F)にオープンし、全ての横浜市立図書館の本の貸出、返却サービスを行っています。7月3日(日)～7月22日(金)迄、パネルの展示を行い、同時に大型スクリーンによるスライドショーで見学会のポイント箇所の案内も行われました。多くの方の関心を集めることができました。

また、コロナにより中止となっていた港北図書館(菊名)でのパネル展示会、および講演会を3年振りに開催することができました。展示会の期間は、7月31日(日)～8月27日(土)。久々のイベントであり、コロナ対策も含め慎重に関係者と事前対応を協議の上、開催に漕ぎつけました。会場の港北図書館1階の“港北まちの情報コーナー”で展示パネルに関心を持っていただける方々も数多く、8月13日(土)と8月20日(土)の両日には、個別の説明を行う“ミニレクチャー”も行い、日吉台地下壕への関心と理解を深めていただけたものと思われました。8月6日(土)には図書館二階の会議室で講演会を行いました。コロナの不安が拭い去れない時期、どれほどの方々に来場頂けるか不安でしたが、密を避けた椅子の配置の会場はほぼ満席の28名の来場となり、90分の講演の後の質疑応答時間には複数の方々から質問やご意見をいただきました。またアンケートにも多くのご意見や感想をいただきました。地下壕の存在を明確にご存じの方は数少なく、「是非見学してみたい」とのご意見も多く寄せられました。「戦争にならないために、善悪二元論でなく、自由な論議が重要」との大変貴重なご意見もいただきました。3年振りとなりましたが、再開出来て本当に良かったと思っています。



展示会：日吉の本だな



港北図書館での講演会(8月6日)

150号達成記念原稿を募集します!!

会報第1号が発行(1989年5月10日)されてから、今年の6月17日で150号の発行をすることが出来ました。そこで会員のみなさまに150号達成を記念して、会への思いをお寄せいただきたく、原稿を募集致します。200～400字程度で、11/30(水)迄にご送付よろしくお願ひ申し上げます。会の更なる発展のためにも、多くの皆様の一言をお待ちしております。次号(152号)以降、随時掲載の予定です。

送り先：郵送 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 亀岡敦子 宛

or メールアドレス fujisunset-0124@cilas.net 会報編集長 小山信雄 宛

慶應義塾大学出身の元学徒兵・岩井忠正さんを悼む 元特攻兵の最後の伝言

運営委員 遠藤美幸

慶應義塾大学出身の元学徒兵の岩井忠正さんが9月1日に逝去された(享年102歳)。2019年4月、日吉台地下壕保存の会では人間魚雷「回天」と人間機雷「伏龍」の隊員であった岩井さんを日吉キャンパスにお招きして戦場体験の話をして頂いた(会報第138号参照)。岩井さんは慶應予科時代を過ごされた日吉キャンパスを懐かしそうに見て回られた。今でも忠正さんの笑顔と茶目っ気たっぷりの語り口が耳に残っている。

1920年5月、陸軍少将を父にもつ岩井さんは10人兄弟の5男として熊本市に生まれる。1943年10月21日、明治神宮外苑で大規模な出陣学徒壮行会が行われ、岩井さんも雨の壮行会に参加し行進した。同年12月10日、横須賀の海兵団に海軍予備学生として入団。「どうせ死ぬなら潔く一発で」との思いから岩井さんは特攻に志願した。

上官が「回天が貴様らの棺桶だ!」と放言。岩井さんは死を覚悟していたが、先端に1.6トンの炸薬を装着した全長14、5メートルの実物の「回天」を見てさすがにぞつとした。岩井さんは最初に光基地(山口県)で人間魚雷「回天」の訓練を受けるが、1945年6月に久里浜(神奈川県)の人間機雷「伏龍」の部隊に転属になる。特攻兵器に優劣をつけること自体愚かな思考だが、「伏龍」ほど奇妙で成算がない「自殺兵器」はないのではないか。「伏龍」は米軍を水際で壊滅する目的の本土決戦用の特攻兵器だが、「伏龍」は乗り物を使わず生身の身体一つと、粗悪な潜水服、性能の悪い呼吸装置を背負い、武器は竹竿の先の機雷で、海底を徒步で移動し待ち伏せし、敵船を突いて自爆する。誰が考えてもうまくいくとは思えないが、敗戦の2ヶ月前「伏龍」を生み出すほどに海軍は追い込まれていた。同時に国民の命をとことん軽視していた。結局、「伏龍」は実戦に使われなかったが、「訓練中に若い隊員が何人も事故死した」と岩井さんは語る。岩井さん自身も海中で酸欠に陥り死にそうになった。

岩井さんは「特攻隊員がみな喜んで天皇のため、お国のために命を捧げようと思っていたわけではない。本当は生きていたかったが、それを言つてはいけない空気があり、自分もその空気に迎合してしまった」と語った。

「沈黙は中立ではない。沈黙はその体制を作り、強化することに繋がる。体制に無批判に順応しているととんでもないところに連れて行かれる。沈黙してはいけない。自分と同じ過ちをしてはいけない」。これが、岩井さんがもっとも若い人に伝えたいと最後まで熱弁されたメッセージである。まさに、現在の日本に通じるメッセージだ。

岩井忠正さんはユーモアにあふれ、人を魅了する素敵な方で、いつも私たちの方が元気づけられた。岩井さんが遺された数々の言葉を思い出しながら、いま、おかしいことにおかしいと声を上げ行動する大切さを噛みしめている。心よりご冥福をお祈りいたします。



岩井忠正さん 2020年5月撮影
(100歳) ご息女、岩井直子さん提供

福澤諭吉記念 慶應義塾史展示館 “展示”のお知らせ

現在、下記要領で展示が行われております。予約なしでどなたでもご来館いただけますが、団体(15名以上)の場合は、事前に“来館予約フォーム”的作成が必要です。詳しくは慶應義塾史展示館HP“入館方法のご案内”を参照ください。

- 会場：慶應義塾三田キャンパス内 慶應義塾図書館旧館2階
- 開館時間：10:00～18:00
- 入場料：無料
- 閉館日：日曜日・祝日・夏季一斉休暇・年末年始・入試期間
- アクセス：JR田町駅 徒歩8分、都営三田線 三田駅 徒歩7分/赤羽橋 徒歩8分
- コンセプト：本展示館では、福澤諭吉の生涯と慶應義塾史を、多くの「実物」と当時の「言葉」でたどります。日本での洋学の流れを象徴する「一筆書き」の線が、ストーリーを示しながら来場者を誘います。

☆活動の記録 2022年6月～9月

- 6/11(土) ガイド学習会(日吉地区センター) 6/17(金) 会報150号発送(来往舎小会議室)
- 6/18(土) 地下壕見学会 寄宿舎寮生 12名 中寮・浴場棟を見学
- 6/25(土) 地下壕見学会 26名
- 6/29(水) 地下壕見学会 電子情報通信学会プラチナクラブ 20名
- 6/30(土) 運営委員会(慶應義塾高校 多目的室)
- 7/2(土)～23(土) 地下壕展示会 日吉の本だな【横浜市立図書館図書取次所】(協生館)
- 7/5(火) 地下壕見学会 福澤研究センター日吉設置講座 44名・工藤ゼミ 12名
- 7/9(土) ガイド養成講座① 応募者5名(箕輪町集会所)
- 7/12(火) 地下壕見学会 福澤研究センター日吉設置講座 36名
- 7/13(水) 地下壕見学会 慶應義塾高校選択旅行Aコース 19名・Bコース 25名
- 7/14(木) 第27回平和のための戦争展 in よこはま準備(かながわ県民センター)
- 7/15(金)～17(日) 第27回平和のための戦争展 in よこはま(かながわ県民センター)
- 7/16(土) 特別企画2「核のない世界を」・7/15(金)～17(日)展示 約400点(一階展示場)
- 7/23(土) 定例見学会 27名 7/30(土) 夏休み見学会 22名
- 7/30(土)～8/27(土) 地下壕展示会(港北図書館)
- 8/6(土) 定例見学会 25名・地下壕講演会(港北図書館) 28名
- 8/11(木) ガイド養成講座② 日吉の地下壕と海軍の概要(中原市民館)
- 8/20(土)～22(月) 第25回戦争遺跡保存全国シンポジウム広島大会(広島市青少年センター)
- 20(土) 全体会・講演会 21(日)分科会 22(月)現地見学会
- 8/20(土) 地下壕見学会 慶應義塾未来先導基金ワークショップ 34名
- 8/28(日) ガイド養成講座③ フィールドワーク(キャンパス外から見る海軍地下壕群)
- 9/1(土) 運営委員会(慶應義塾高校 多目的室)

○地下壕見学会について:

11月から月2回で実施します。3月から月1回・30名で再開した地下壕見学会は11月から月2回・30名(第2水曜日・第4土曜日 13時から変更もあります)でご案内できることになります。(感染対策上、定員は今まで通り30名まで) 小学校の見学会など、100名規模の見学会はまだ実施できません。

★土曜日の見学会は12月まで予約が終了。9/24、10/22、11/26、12/17 ★水曜日の参加者受付中 11/9、12/7、1/11 ★2月は入学試験の関係で日程変更することがあります。

★お問合せ・申込みは見学会窓口まで TEL/FAX 045-562-0443 喜田 (午前・夜間)

連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758

(見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報 (年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会 郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 阿久沢 武史 (加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会